

昭和五十二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店 №329915

購読料 月額300円 6カ月前納制

くもくじ

◇誌上学習会 マルクス・レーニン主義とは何か①◇	
マルクス主義と改良主義	2
―レーニンと改良主義批判―	
「中道路線」に未来はない	7
理論と実践の結節点	12
―「総括」の弁証法的意義―	
現代情勢をどうとらえるか	14
―『七八国民春闘白書』の問題点(一)―	
■投稿	
九月大会の反省をもとに討論を組織	17

刊 旬 社 会 通 信

NO.8

一九七八年二月二日

一九七八年二月二日
毎月一日・二日・二日・二日三回発行

◇誌上学習会 マルクス・レーニン主義とは何か①◇

マルクス主義と改良主義

——レーニンと改良主義批判——

今日、マルクス・レーニン主義にたいする批判が強まっています。ブルジョア的な「科学者」や「哲学者」たちは、これまでなんどマルクス主義は反駁され、「絶滅」されてしまったと公言したことでしょう。にもかかわらず、彼らは「絶滅」されてしまったはずのマルクス主義への攻撃に、いぜん死力をつくしているのです。

なぜでしょうか。マルクス・レーニン主義の思想は不敗だからです。たたかいのなかで成長し、発展し、より生き生きとしたものになってゆくからです。

本号から連載するこの研究会は、読者のみなさんとともに、生活のなかで古典を討論し、研究し、そしてたたかいに生かしてゆきたい、そのための一助になればとの意図からはじめるものです。まずレーニンの『マルクス主義と改良主義』をとりあげることになりました。テキストは岩波文庫版『カール・マルクス』です。感想、ご要望を寄せて下さい。

(編集部)

なぜ改良主義をとりあげるのか

司会 今日的主要な特徴は、資本主義の一般的危機がひじょうに深化していることです。ですから、この一般的危機の深化をどうとらえるか、また、こうした情勢のもとで、どのように階級闘争をおし進めるかについて、少なからぬ議論が存在しています。一月四日の『赤旗』は、前副委員長の袴田氏を除名した旨を報道しましたが、これもその一つのあらわれでしょうし、また、第四〇回大会(一九七七年二月)以降、きちがいじみて激しくなった社会党内の「協会対反協会」キャンペーンも、やはり、こうした問題と密接に関連していることと思います。とくに、社会党左派にたいする政府・独占資本、そして彼らの下僕であるジャーナリズムの攻撃の本質をしっかりとつかまえる必要があるように思うのです。これらの問題については、本誌ですでに明らかにしてきたことでもありますから、ちょっと視点を大きくして、考えてみることもおもしろいのではないかと思います。本誌の新年号(第七号)でも少しふれたのですが、「われわれの先覚レーニンが第一次世界大戦の運動を、どのような困難な事情のもとにすごしたか、そして大戦をどのような困難のもとに迎え、さらにその大戦をどう克服し、ロシア革命にどのように対したか」、あるいは、「わが勤労国民がどのような反動時代に耐えて、今日にいたり、再び反動時代を迎えよう

としているか？」等々といったことを、歴史的に解明し、反動勢力を克服する歴史を学び返そう、そうすることが、その誤りを少なくすることではないかと考えるからです。

山田 レーニンは、第一次大戦前、そして大戦中、正しいことを主張したがゆえに、敵から徹底的に孤立させられましたね。しかし、第二次、第三次のロシア革命がレーニンの主張の正しさを証明しました。

樹徳 当時のレーニンを知るうえで一番おもしろいのが、レーニン夫人クルプスカヤの著した『レーニンの思い出』（青木文庫）です。もちろん、われわれはレーニンのような天才ではありませんから、レーニンと同じことはできません。しかし、近づくことはできると思っています。まだ読んでいらっしやらない方はもちろんですが、一度お読みになった人も、ぜひ読み返していただきたい本ですね。

松井 そうです。たいへんおもしろいし、ためになる。ぼくらの運動を考えるうえでね。

樹徳 『思い出』のなかでクルプスカヤは、レーニンといっしょに「よく図書館に通ったり、山に登った」と書いていますが、反動の嵐のなかで、さすがのレーニンといえども苦悩せざるをえなかったこともあったということでしょうね。

松井 そうかもしれないな。「神経衰弱」になったといえれば、言いすぎかもしれないけどね。レーニンは本当に苦労したようだな。

レーニンは改良主義と徹底的にたたかった

鈴木 当時、レーニンは、ツァーリズムと徹底的に闘争すると同時に、第二インターナショナルの主要な潮流をなしたレギーンとかゴンバース、カウツキーやブレハーノフといった改良主義者と猛烈な論争をやっていますね、マルクス主義を守り発展させるために。

松井 歴史の歩みを見通せたのは、レーニンだけだな。ローザ・ルクセンブルグもりっぱだが、レーニンのほうがえらいよ。

鈴木 社会党内だけじゃありませんが、「マルクス主義は古くなった」という人は多い。民社党、総同盟の幹部連中は改良主義者でしょうが、社会党第四回大会で社会党から脱落した例の三人組などは改良主義者とはいえない？ 彼らに「主義」などありませんから。

松井 そんなことはない。彼らは改良主義者だよ。だから、彼らを徹底的に批判することは重要だ。改良主義にもいろいろあるからね。

樹徳 改良主義者たちはきまって二つのことを主張しますね。第一は、マルクス主義はすでに「絶滅」され、「古く」なったとのたわごと、第二は、マルクス主義者は「改良のたたかい」を軽視するということ、がそれです。

松井 マルクス主義が「古く」なり、「絶滅」されていけば、改良主義者どもが、マルクス主義を批判する必要はないわけだろう。そんな主張は馬鹿げているな。しかも、「改良のたたかい」をもっとも熱心にたたかうのがマルクス主義者だよ。

司会 今日政府・独占資本の労働者階級に階級意識を植えつけまいとする、あるいは労働者階級の階級の本能を眠り込ませようとの主要な方策の一つは意識的な、あるいは「善意」の改良主義者をも動員してやらせようということでしょう。だとすれば、改良主義の本質とその階級の意味を私たちがしっかりおさえることができます。重要になりますね。

鈴木 田さんや社会党右派の人たちを独占資本の連中がなぜあれほどまでもちあげたのか、ということですね。

司会 マルクス・エンゲルスもブルードンなどを徹底的に批判していますが、その時代背景からみてレーニンの改良主義批判のほうがより具体的です。したがって、レーニンが改良主義をどのようにとらえ、批判し、克服したのかといった問題は、参考になる点が多いと思います。

樹徳氏の方からレーニンの『マルクス主義と改良主義』（岩波文庫版『カール・マルクス』に収録）から、その要旨を報告していただき、討論に入ってゆきたいと思います。

「マルクス主義と改良主義」執筆の背景

樹徳 簡単に報告します。

『マルクス主義と改良主義』は、岩波文庫本で六頁ですから、短かい論文です。しかし内容はひじょうに豊富で、今日的な教訓にみちています。とはいってもレーニンがこの論文を著したのが一九一三年九月ですから、われわれの運動をとりまく情勢は客観的にも主体的にも大きな変化——われわれにとって有利な——があることはいうまでもありません。

まず第一に、レーニンがこの論文を書いた背景からはじめたいと思います。本来なら、第二インターナショナル内部の主要な傾向、つまり当時のヨーロッパの社会主義運動、労働運動についてのコメントから入るのが本当かもしれません。しかし、それはこの研究会でこれからとり上げられることでしょうから、主にロシアの動きを中心に述べることになります。

さきにもちよつとふれましたが、レーニンが『マルクス主義と改良主義』を書いたのは第一次大戦直前の一九一三年九月です。一九〇五―七年の第一次ロシア革命の失敗のあと、ロシアには反動の嵐が吹いていました。政府は第二国会（注1）を解散し、労働者・農民を激しく弾圧しました。一九〇七―一〇年の反動がいかにすごいものであったかは、この反動が「ストルィピンの反動」と呼ばれていることにも明らかです。

ところで、一九一〇年夏頃から労働運動が高揚しはじめます。全国のいたるところで労働者のストライキ、政治的デモンストレーションが起こっていますし、農民の地主にたいする闘争も拡がりはじめました。こうして、ロシアの労働者階級とマルクス主義政党に、ツァーを打ち倒し、新たな革命を準備する歴史的任務が課せられたのです。

しかし、この当時、歴史的任務を遂行するロシア社会民主労働党内の状態は、複雑なも

のがありました。つまり、革命的マルクス主義者⇨ボリシエビキと日和見主義者⇨メンシエビキ、トロツキー派、調停派（注2）とのあいだの対立、闘争が激化していたことです。では、日和見主義者⇨メンシエビキはどのような主張をおこなっていたのでしょうか。

第一は、革命は一九〇五年で基本的に完了したとして、民主主義革命の課題を新たにとり上げることに反対したことです。第二は、革命的綱領や革命的スローガンを取り下げ、合法的な党を解散して、合法的な労働者党の結成を主張したことです。第三は、ツァーと和解・妥協し、労働者にささやかな改良を呼びかけたことです。こうして、メンシエビキは解党派⇨日和見主義に転落したのです。

レーニンに率いられるボリシエビキは、メンシエビキの日和見主義的主張を徹底的に批判しました。なぜなら、支配階級は労働者階級の無知によっても支配するからです。ですから、解党派・日和見主義者が労働者階級の歴史的事業である革命の裏切り者であり、裏切り者であることを人民大衆の前に明らかにして、彼らの策動と労働者・農民への影響を粉碎することは、革命を勝利に導くために不可欠であったわけです。

こうした解党派・日和見主義者・改良主義者とのたたかいで指導的な役割を果たしたのがこの時期のレーニンの一連の論文です。たとえば、こうした論文に『ロシア社会民主党内の改良主義』（全集第一八巻）、『論争問題』（一九巻）、『二つの道について』（二〇巻）等があります。そのなかでもきょうとり上げた『マルクス主義と改良主義』は代表的な論文です。

改良主義は日和見主義の一種

本論に入ります。結論的にいいますと、改良主義は日和見主義の一種だということです。日和見主義の本質は、社会主義運動や労働運動における反マルクス主義的、非革命的傾向であり潮流です。ですから、レーニンは『第二インターナショナルの崩壊』、『日和見主義と第二インターナショナルの崩壊』等の論文で日和見主義の本質をこう規定しています。

『日和見主義の主要な点は、階級協力の思想である。：日和見主義とは大衆の根本的利益を労働者のうちのとるに足りない少数者の一時的利益の犠牲にすることであり、言いかえれば、プロレタリアート大衆を敵として、一部の労働者とブルジョアジーとが同盟することである。』

「日和見主義の政治的内容は、：諸階級の協力、プロレタリアート独裁の否定、革命的行動の拒否であり、ブルジョアの合法性を無条件に承認し、プロレタリアートを信頼せず、ブルジョアジーを信頼することである。」

つまり、改良主義者とは、「労働者階級の志向と活動とを直接、間接に改良に限定している人たち」だというわけです。

このように、レーニンは改良主義、および改良主義者の本質を明らかにし、マルクス主

義の立場から労働者階級が、改良と改良闘争についてどのような態度をとるかを、この論文で次のように述べています。

「マルクス主義者は、改良のための闘争、すなわち権力をこれまでどおり支配階級の手に残したままでの、勤労者の状態の改善のための闘争を認めている。」(二〇九頁)
 「しかし、……マルクス主義者は改良主義者にたいして非常に断固たる闘争を行なっている。彼ら(改良主義者)は労働者階級の志向と活動とを直接・間接に改良に限定している人たちなのである。改良主義者は労働者に対するブルジョアの欺満であって、労働者は、資本の支配が存在している限り、個々の改善にもかかわらず、どこまでも賃金奴隷であることをまぬがれないのである。」(二〇九頁)

つまり、改良は、それ自体いくら積み重ねても、労働力を売らなければ生きてゆくことができないという「賃金奴隷」の状態から解放されないということです。このことをしつかりおさえているかいないかが、改良主義者とマルクス主義者との区分をなすというわけです。

(注1) 一九〇七年二月二〇日に召集がきめられ、六月三日に第二国会は解散されている。

(注2) ロシアにはさまざまな日和見主義の偏種があらわれたが、その一つが調停滞と呼ばれた。

(注3) 特別の場合を除いて、ページ数は岩波文庫版『カール・マルクス』のページ数を示している。

(つづく)

「中道路線」に未来はない

一、「九割が中産階級化」とは？

昨年五月の政府による世論調査が発表されると、マスコミはいっせいに、「今や国民の九割は中流意識」であるとか、「九〇%は中産階級となった」などと、キャンペーンをくりひろげた。

さっそく江田氏や田氏や山本幸一氏等、マスコミに弱い人々にとりあげられ、社会主義協会攻撃の一つの口実とされ、社会党をゆさぶり、破壊する武器とされた。

この「世論調査」とはどのような内容だったのであろうか。

内閣総理大臣官房広報室の『国民生活に関する世論調査』をみると、事實は次のとおりである。

「お宅の生活程度は、世間一般からみてこの中のどれに入ると思われますか。(ア)上、(イ)中の上、(ウ)中の中、(エ)中の下、(オ)下」という設問に対して、「回答は、上が〇・六%、中の上が七・五%、中の中が五九・二%、中の下が二三・四%、下が五・〇%、不明が四・二%であった。これは次のように解説されている。

「自分の生活程度が、世間一般からみて、どの程度のところにあるとと思っているか」に対しては、「中の中」が五九%を占めている。これに「中の上」八%、「中の下」二三%をあわせると、「中」は九〇%にのぼり、長期的にみると、「中」意識が大多数を占める傾向は、ほとんど変化していない」と。

ようするに「世間一般からみて」、自分の生活は中くらいであると思っている人が九割を占めているにすぎない。

一茶に、「めでたさも、中くらいなりおらが春」という句がある。貧乏な一茶が中産階級であったわけではなく、中流意識をもちあわせていたわけでもないことはいままでもない。

「生活程度が、世間一般からみて、どの程度のところにあるとと思っているか」と問われれば、十人中九人までが中程度と答えるのは当然であろう。上野駅や新宿駅の地下路に眠る人々にくらべれば、よりましであると思う人が大部分であろうからである。

本来、中産階級とは、生産手段を所有するが、自らも労働し、時にはごく少数の他の労働力を雇用する小零細経営者や農民、あるいは小金利生活者や自由職業人や高級管理職等のことである。このような中産階級が「国民の九〇%を占める」などということが、まったくのウソであるはいまでもない。

この『世論調査』において注目すべき点はむしろ次のような事実にある。

(1)「上」と答えた人が〇・六%、「中の上」が七・五%ではないのに対し、「中の中」が五九・二%、「中の下」が二三・四%、「下」が五・〇%もある。「中の中」以下が、八七・六%を占めているのである。

(2)「お宅の暮らし向きは、去年の今頃とくらべてどうでしょうか。楽になっていますか、苦しくなっていますか、同じようなものですか」という設問にたいして、「楽になった」と答えた人はたったの三・〇%であるのにひきかえ、「苦しくなった」と答えた人は、四六・一%にもおよんでいる。

(3)「お宅の生活で、去年の今頃と比べて何か良くなっている面がありますか。この中ではどうでしょうか。(ア)食生活、(イ)衣生活、(ウ)：：：」という設問にたいして、「良くなったものはない」と答えた人は、七六・七%にも達している。

「去年の今頃とくらべて、何か悪くなっている面がありますか」との間に對しては、「食生活」で一五・一%、「衣生活」で九・七%、「レジャー余暇生活」で一・三%の人が「悪くなった」と答えている。

「全体としてみた場合、お宅の生活は去年の今頃よりも向上していると思いますか。低下していると思いますか。同じようなものだと思いますか」という問にたいしては、「向上している」が一〇・四%であるのにたいし、「低下している」が二二・四%ある。

(4)「将来せめてどの程度の生活をしたかと考えているか」にたいしては、「食べるには困らない生活」が四二・九%と最も多く(四六年一月調査では三四%であった)、「家族旅行が気軽にできる生活」が三一・二%、「家族一人一部屋ある生活」が一五・三%となっている。「将来せめて」この程度のささやかな生活をのぞむ人々が、もし本当に「中産階級」であるとすれば、日本の「中産階級」とは、なんと貧乏であることか。

(5)「将来の生活に對して不安を感じていますか」という問にたいしては、「不安を感じている」が四七・四%である。

(6)「収入と比較して、物価の上昇をどのように感じていますか」にたいしては、「物価の上昇に追いついていくのが精一杯で、生活を向上させるゆとりがない」が三五・七%、「物価の上昇が大きく、生活をきりつめなければならぬ」が二四%も占めている。

「物価の上昇に對して、お宅では暮らしの上で何か工夫をしていますか」にたいしては、「安い物を買うなど買物の工夫をしている」が四六・五%、「生活をひきしめ消費を抑えている」が三八・七%、「できる物は自分で作っている」が二一・三%、「内職・パートをしている」が一・七%を占めている。

これが、わが「中産階級」、「中流意識」の実態である。

二、「中道路線」に基盤はない

近年の『国勢調査報告』、『就業構造基本調査報告』、『事業所統計調査報告』等を資料として、日本の階級構成の変化をみると次の表のとおりである。

階級構成表

	年	
	一九六〇年	一九七五年
有業者総数	四三、六〇〇千人	五三、五〇〇千人
労働者	二四、〇〇〇	三七、二〇〇
農・漁民	一一、九〇〇	六、七〇〇
小企業者	五、五〇〇	八、二〇〇
資本家	一六〇	三〇〇
うち独占資本家	五	七
その他 (自由業、地主)	一、〇四〇	一、一〇〇
	二・四	一一・一
	一〇〇%	一〇〇%
	五五・〇	六九・五
	二九・六	一一・五
	一一・六	一五・三
	〇・四	〇・五六
	〇・〇一	〇・〇一

※ 有業者とは、一五歳以上の就業労働力をさしています。

労働者階級は、資本主義的高度経済成長とともに、この一五年間で一、三二〇万人増加した。実に五五%の増加である。

今や三、七二〇万人で、有業者総数の約七〇%を占めるにいたっている。この人々は生産手段を所有せず、労働力を売ることによって生活している賃金労働者であって、決して「中産階級」ではない。

産業により、職場により、階層により、搾取率にかなりの違いはあるが、三、七二〇万人の労働者は、いずれも、たった〇・〇一%程度の独占資本に率いられた、〇・六%にも満たない資本家階級に、日々、搾取されている人々である。

近年の日本における平均的な搾取率(剰余価値/賃金 又は不払労働/支払労働)は、鉱業で三〇〇%、製造業で四〇〇%、建設業で一五〇%、電気・ガス・水道・運輸・通信業で三〇〇%程度と計算されている。(剰余価値は、企業者利得、支払利子、地代、資本減耗引当等の合計として推算される)

製造業は、量的に大きな比重を占めるとともに、資本構成も中位であって、この高い搾取率が、国内の平均的な搾取率を規定している。製造業の年代を追ってみると、一九五〇年代の三〇〇%台から、一九六〇年代、七〇年代の四〇〇%台へと、搾取率は上昇している。今日の日本の平均的搾取率が三〇〇%程度であるとすれば、一日、八時間労働のうちの、(不払労働)/(支払労働)は(6時間)/(2時間)である。

つまり労働者の一日六時間分の労働は、独占資本に率いられた資本家階級にただ取りされ、搾取されているのであって、労働者階級が受取っているのは、自分の生産した価値の八分の二、つまり、四分の一相当分ではない。一五万円の賃金しか支払われていない労働者は、その三倍の四五万円分の生産物（または労働）を搾取されているのである。したがって、労働者が大幅賃上げを遠慮する必要はみじんもないのである。

この（資本家の取得）／＼労働者の取得）は、文字通り搾取・対・被搾取の関係であって、これが「分配」などという関係でないのは、どろぼうとその被害者の関係が「分配」関係でないのと同様である。企業者利得と利子と地代とは、剰余価値のまさに分配であるが、搾取率はまさに搾取率であって、真実にたいして忠実であらんとする者においては、決して「分配率」などと呼ぶべきものではない。

日本の搾取率が、先進資本主義諸国における搾取率にくらべて、ぬきんでて高いことは、過去の「経済成長率」の高さ、今日の「国際競争力」の強さ、「円高」の進行などからも否定すべくもない事実である。

農漁民は、この一五年間でほぼ半減し、有業者人口の一三％たらずになってしまった。農民がいかに急速にプロレタリア化してきたかを示している。しかも、兼業農家の総農家戸数にしめる割合は、一九六〇年の六六％から、七〇年には八四％に高まり、さらに七五年には八八％にのぼっている。今や農業所得だけで生活をまかなっている専業農家は総農家戸数の一二％にすぎない。兼業のなかでも、兼業を主とする第二種兼業農家が、七五年では、全体の六二％に達している。こうして、独占資本のもとにおいて、農民はきわめて不安定な状態におかれ、プロレタリア化、半プロレタリア化が進行しているのである。

従業員四九人以下の「役員」、「個人企業主」、「家族従業者」などの小企業者は、有業者の約一五％である。農民の階級分化が急激に進んだこの一五年間に、比率も若干増加している。しかし、中小企業の倒産が増しているため、小企業者はきわめて不安定である。負債金額一、〇〇〇万円以上の倒産をみると、一九五五年までは、年間一、〇〇〇件未満であったものが、五六年に一、〇〇〇件をこえ、六四年には年間四、〇〇〇件を突破し、翌年には早くも六、〇〇〇件をこえ、七四年にはとうとう一万件を突破して、年々急増するままである。倒産企業の負債金額は、一九五五年に四四二億円であったものが、六四年には四、六三一億円、七四年には一兆六、四九〇億円、五二年には二兆二、六五八億円と、驚くべき「高度成長」を上げている。

こうして、わが「中産階級」というべき小土地所有農民も、小企業家も、有業者のなかで占める比率はごく小さいだけでなく、独占価格、税金、インフレによって独占資本から三重に搾取され、土地や漁場や資本を収奪され、ますます不安定な状態に追いやられていく。しかもイギリスやアメリカ等の中産階級とはくらべものにならないほど貧乏であって、「中産階級」の名に値しないような農民や小企業者が大部分である。

有業者の七〇%を占める労働者も、一三%を占める農民も一五%を占める小企業家も、自ら勤労し、その成果を独占資本に三重、四重に搾取され、苦しめられているという点において、同じ勤労国民である。

ゆえに、有業者の九八%を占めるこの勤労国民は、資本主義の矛盾の深化とともに、独占資本とたたかう共通の戦線につき必然性をもっている。一定の条件の成熟とともに成立する反独占・勤労国民擁護の統一戦線は、いっそう高度に成熟した客観的条件と主体的条件のもとで、社会主義を実現する戦線へ発展する必然性をもっている。強大な科学的社会主義政党の実現と、それによる指導が必要不可欠であるが。

労働者階級は、この階級闘争のなかにあって、勤労国民の中心的、主導的な階級であり、今や七〇%という圧倒的人口比率をもって、その歴史的任務につこうとしているのである。この必然的な発展法則に添う運動のみが、最終的には勝利するのであって、「九〇%が中産階級化している」などという独占資本のデマ宣伝に依存する「中道路線」は、やがて夏の日の露のごとく消え去るほかはない。反動期の後には、必ず高揚期が来ることを、われわれは知っている。反動期におけるわれわれの血のにじむような労苦とたたかいは、やがて迎える高揚期において、社会党と労働組合を飛躍的に強化しうる基礎をつくるであろう。

独占資本の映し出す幻影を追う「中道路線」や「社会民主主義」に未来はない。世界の国々で実証されつつあるように、未来は必ず科学的社会主義、つまりマルクス・レーニン主義のものである。

(大内 敬)



理論と実践の結節点

「総括」の弁証法的意義

第四一回社会党大会の統開大会が終った。各級機関でその「総括」がおこなわれている。本稿は（多分本誌の読者にたいしては釈迦に説法に類するとは思わが）「総括」一般の意義について述べることからはじめ、社会主義運動の、いわば「法則的な型」について考えてみることにする。

「総括」とは「実践から学びわれわれの理論の足らざるを補うこと」であり、新たな理論的確信のもとに次の実践を準備することである。

知行合一とか、理論と実践の統一とかいわれ、また、革命的理論なき革命の実践はないともいわれている。だから「教務主義」といわれようと何といわれようと、われわれは理論を大切にする。むろん、われわれは行動のための理論を大切にするのであって、理論のための理論―すなわち教条を弄ぶのではない（したがって、一部の人々の社会党左派へのレッテル「教条主義者」はマト外れである。教条主義とは何かが判らずにレッテルを貼る人もいるのはいへんこっけいという外はない）。

理論と実践の「統一」というからには、この二つの概念が弁証法的な対立物―つまり矛盾をなしていることをまず確認をしよう。そして、「実践のため」の理論―と規定した通り「革命的実践」の指針として理論が存在する。「フォイエルバッハ論」のマルクスの有名な言葉「哲学者達はただ世界をいろいろに解釈しただけであった。大切なことは、それを変えることである」の後段「それをかえること」とはつまり世界（社会主義者の場合社会）の「革命的変革」＝革命の実践を意味する。

われわれがたんにモノ知りになるために学ぶのではないことはこれからも明かであり、学べば学ぶほど「教条主義」との縁が薄れることの根拠が判然とすると考える。

そういうものとしてわれわれが「理論」をとらえれば、この理論は、たたかひの指針として、これが大衆をとらえたとき「物質的な力に転化する」のである。

さて、その理論だが、われわれは「科学的社会主義」を理論的・実践的に調査、研究、討議して究めめる。つまり、理論的（先人のうちたてた体系を演繹的・創造的に適用して）また実践的（行動を通して）に把握するということである（理論の弁証法的把握と名づけよう。そこでは研究の方法論としての演繹法・帰納法を総合した以上の把握がおこなわれる。教条的把握とは似ても似つかぬ態度であることほこでも確認されるであろう）。

この点で一部の人が、左派の態度を「学習（教条）主義」と断じながら一方でたかかひの具体的報告を「単なる経験交流」と片づけ、自らの弁証法の無知を暴露している点はい興味深い。理論学習と一つ一つのたかかひの経験をともに大切にすることにこそ、「教条

主義」とは無縁の作風が証明されていることに気づかないのは、彼らに物事の関連をバラバラに切り離す「形而上学」的態度、すなわち非科学的態度があるからである。

二

さて「理論と実践の統一」は、一般的にどのような型をとるのであろうか。

計画し、実践し、点検する一との三段階が一般的な型といわれている。つまり、理論にしたがって現状を多面的に分析し（解釈し）、運動法則の知識（これも理論だ）を助けに現状変革のみちすじをたて（これが計画）行動に入る（実践）。計画を戦略とかりに名づければ、計画実施中、適時情勢に応じて、個々の具体的な行動目標を変化させる必要を生ずるのであろう。これがいわゆる「戦術的」対応である。所期の計画実現に成功したかどうかは別として、一応行動に区切りがついたとき、あるいは行動の途中にも絶えず戦略（戦術）目標とその時点の状況との比較がおこなわれる。点検とひとくちにいわれる。だが、正確には後者、つまり行動中の目標との偏差確認を点検といい、行動の一区切りごとにおこなわれるそれを「総括」と名づけるべきであらう。もともと、行動期間におのおの長短があり、機械的な区分が正しくないこともむろんである。ここで使用した「戦略、戦術の意味は、社会主義政党的戦略＝革命ということではなく（そのモノサシからいえば戦術ではあるが）一定の時期の獲得目標（ここでは計画の実現）を戦略と名づけ、その方向にむけた一群の措置のおのおのを戦術と名づけているものの、「戦略」と「戦術」の関係の原則はかわらない。両者のあいだに有機的な関係がなくてはならず、戦略（獲得目標）なき戦術（出たとこ勝負）が無意味なことはいうまでもない。

かくて「総括」は、一定（期間）の行動＝実践の区切りにあたって、実践の結果と目標（計画）との格差を点検し、その原因を理論的に探究して教訓をひき出し、次の計画樹立の土台とするのである。

理論はえてして一般的、抽象的なものであり、現実に対応すべきものは個別的、具体的なものである。したがって、理論と実際にへだたりのあるのが当然であるが、理論が精緻であればあるほど、つまり分析と法則に関する知識がより広くかつ深ければ、その程度に応じて理論と、行動の結果としての実際との格差はせばまるのである。

「総括」を通じて「実際」、つまり「現実」にたいするわれわれの認識を豊富にすることができ、次の行動「計画」はより精緻となる。

ひとつの「総括」は、したがって次の行動の大切な準備である。この意味で「総括」なき実践は広義・狭義の戦略にとって無である。

日本社会党第四一回大会の総括は、右の意味からたいへん重要な意味をもっている。九月大会からの流れと、続開大会の結果とのあいだの「法則的関連」をどれだけ正しく汲みとり得るかが各段階の総括の重要なポイントであろうし、その教訓をどれだけ正しく具体的実践に活かせるかが「再生」過程の党活動における「運動面の勝敗」と直接のつながりをもつ。「過程を大切にしたいの財産とする」とはまさにこのことではなからうか。

（志）

現代情勢をどうとらえるか

一 『七八国民春闘白書』の問題点(一) 一

今七八春闘も深刻な不況下の春闘である。不況下の「連敗」春闘の正しい総括のうえにたつて、今春闘をどれだけもりあげうるかどうかは、今後一年間のあらゆるたたかひにとつても、きわめて重大である。

七八春闘をほんものの反独占の階級闘争として前進させるために、われわれにとつて必要な基本視点はなにかという観点から、『七八春闘白書』の情勢分析と方針にみられるいくつかの問題点を簡潔に、そして卒直に指摘しておきたい。

一

まず第一は、主として当面の情勢についてである。とりわけ今春闘情勢においても、その中心問題をなし、あるいは焦点をなすといつてよい不況をどうとらえるか、ならびに独占資本による猛烈で巧妙な不況・赤字宣伝にたいする、われわれの構えについてである。

『白書』は、現在の「円高・不況」について、次のようにのべている。「七八年春闘の経済的枠組みを決める最大の要因は、目下の円高相場が日本経済に及ぼす影響である。昭和四六年のニクソン・ショック時の切上げ副をもはるかに超えた円相場の急上昇は、この三年来、低成長への移行期にあつて低迷しつづけてきた不況を深刻化し、産業構造の変動を加速化しつづける」と。さらに「円高の原因となつたのは先端的工業部門の輸出急増であつた」こと、そして円高が、一方で大資本に巨額の為替差益をもたらすとともに、他方で「輸出産業にブレーキをかけ」、「中小企業の倒産の危機」と「産業の整理淘汰を激化させている」云々と、現下の円高・不況の実態について詳しく分析している。

このような円高・不況の実態と要因の具体的分析が大事であるのはいうまでもない。だが同時にもっと重要なのは、そうした具体的分析と結びつけて、不況の資本主義的本質と根本原因を勤労大衆にできるだけ分りやすく訴え、それを徹底的に暴露することであろう。巧妙な不況・赤字宣伝が独占資本によつて大々的にくりひろげられ、それが勤労大衆のあいだに戸惑い、動揺、たじろぎ、あきらめ等々の気分をかなり強く侵透させている状況にあるだけに、とりわけそうである。

ところが、この点にかんする『白書』の指摘をみると、それは「自民党福田型」の「政策の失敗」や「無策ぶり」にあるかのようである。

「円高・不況の悪循環の様相は、日本経済にとつて唯一必然の道であつたか」といふと決

してそうではない。現状認識を欠いた自民党政府の経済政策の失敗こそが、今日の状況を招いた第一の原因である」。

「現在の円高、不況の悪循環局面は、日本経済の構造変化のなかで、それに逆行的な自民党福田型経済政策の帰結である」。

「政府のこうした無策ぶりは、現状の日本経済の適確な認識を欠き、今後の経済運営への展望を見失ったことに根ざしている」等々、とのべているからである。

自民党の「政策」のいかんによって、不況がより促進されたり、あるいはより激化されたりすることは確かである。しかしいうまでもなく、不況（正確には恐慌）そのものは、「政策」のいかんにかかわらず、資本蓄積の発展の客観的法則として周期的に発現する、資本主義独特の（社会主義にはない）「業病」である。独占資本とその政府による最大限利潤（搾取）追求が一定の頂点に達したとき、その必然的反動として、おこるべくしておこる周期的で全般的な過剰（厳密には資本の）生産、そしてしかも、この過剰のゆえの窮乏々々豊富ななかの貧困々々という、まったく矛盾し逆立ちした、資本主義固有の社会的「業病」である。（くわしくは、『空想より科学へ』の第三章参照）

この意味で、不況は、独占資本の「政策」――の「失敗」や「無策」の結果でなく、むしろ反対に、「政策」そのものの必然的産物である。

二

したがって、われわれにとって何よりも大事なものは、不況は、資本主義の本質と根本矛盾そのものに根ざすものであること、独占資本による強搾取と「もうけすぎ」のいわば反動（結果）にほかならないこと、したがって労働者と勤労国民にはいっさい責任がないこと、にもかかわらず独占資本は、巧妙な不況・赤字宣伝で大衆をごまかしつつ、不況のりきりのための「しわ寄せ」（首切り「合理化」、賃下げ、倒産、失業、インフレ、重税など）を勤労大衆に一方的におしつけていること、この結果不況下でも独占資本だけは肥え太っていること、さらには資本主義が続いているかぎり不況という「業病」はなくなるならぬ（社会主義になってはじめてなくなる）こと――こうしたことを、もっと徹底的に、そしてできるだけ具体的に分かりやすく勤労大衆に明らかにし、暴露し、宣伝することにある。

こうした活動が徹底的に行なわれるときはじめて、またそれに応じて、円高・不況下の勤労大衆の不満や苦しみ、反独占の怒りへ真に転化し、反独占のたたかう力となって結集され、同時にその中で、資本主義にたいする批判と社会主義への展望と確信を、労働者階級と勤労国民の意識のなかに正しく浸透させることができる。したがってまたこのとき、国民春闘は、反独占統一戦線の主体と力を真に強める大きなたたかいとなることのできるからである。

同じことを、円高・不況下の勤労大衆の「窮乏化」にかんする『白書』の把えかたについても指摘せざるをえない。たとえば、こうのべている。

「オイルショックから満四年を経過して、われわれ労働者の生活は『萎縮する消費』の日々が続いている。この間名目賃上げ率の低下のため、実質賃金が低下もしくはほとんど上昇していないからである。われわれの生活状態はこのようにして、いま不況の中で改善への出口を見出すことができない。実質賃金が停滞もしくは低下すれば消費生活が苦しくなることは当然であるが、今日のわれわれの生活の問題点は、それがいかに苦しいかという静態的な状況の把握よりも、むしろ、それは今後どのように打開されていかなければならないかという、動態的な理解のほうが重要である」と。

はたしてそうだろうか。労働者の生活状態の改善が「今後どのように打開されていかなければならないか」、そのための闘いの方向を指し示すことはもちろん必要である。だが、そのためにも必要なのは、社会の主人公であるはずの労働者の生活が「いかに苦しいか」に非人間的な生活苦や労働苦を強いられるか、そしてその原因はすべて独占資本の搾取にあり、不況・赤字を口実とする独占資本の「しわよせ」にあることを、勤労大衆にもっともっと「把握」させることである。このことなしには、大衆の不満や苦しみはほんとうに反独占の怒りとならず、したがって反独占のたたかう力となって結集されえないからである。また、このうえでしか、生活状態改善への「打開」の途は実際にはひらけていかないからである。この意味で、「いかに苦しいか」、なぜに「苦しいか」を「把握」することは、「静態的な状況の把握」ではなく、むしろ反対に、資本主義下の階級搾取と階級対立、勤労階級の「窮乏化」という「現実」のもとで、労働者と勤労大衆の状態を真に改善するための闘いの鉄則といふべきものである。この肝心なことが忘れかけられたり軽視されたりしているところに、たたかいが停滞している——反撃の一般的・客観的条件が広範につくりだされているにもかかわらず——最大の原因があるといってもけつて言いすぎではない。

(つづく)

■ 投稿 ■

九月大会の反省をもとに討論を組織

—

さる九月大会は「国会議員等への代議員権を与える」ことを強引な議事さばきで可決した。いや「した」というより「させられた」のである。

それは、私も反対の手をあげていたし、議長団席の前では数名の人が「反対」と立つてつめよっていた姿に止められていた。にもかかわらず、後日「社会新報」までが満場一致で可決したと報道したのである。

はたしてこれでよいのか。社会党の民主主義にかかわる問題が、このように曲げられてなから脅迫的にうえからおしつけられてよいものであるうか。憤りと口惜しさにあけくれば九月大会の反省をふくめ、私どもの一二月統開大会むけてのたたかいはここから強い決意でとりくまれていった。

長崎の代議員は六名である。さいわいにこの六名は代議員権問題については反対であるし、すべて慎重なうえにも慎重に下部に徹底した討議を訴えることになった。

一〇月三日長崎総支部をかわりに、一月五日の対馬支部にいたるまで総支部、支部一〇支部をそれぞれの出席代議員が手分けして大会報告をかねオルグしてまわった。なかでも諫早支部は傘下各班におろし、徹底した討論をまきおこしていった。

その後、私の所属する長崎総支部も一二月統開大会にのぞむ意志統一のため、一二月八日全党員会議を再度開催した。

下部に入り大衆に接すれば接するほど、党員のなかには代議員権の問題が正しく理解されていないことがわかった。これを学習をかね、黒板に理論的に数字をあげ説明してゆく事で、はじめて数の魔術を知ったのである。

これらの党員のなかには「三分の一の基準」は、今日の国会議員数の三分の一と理解していたものも少なくなかった。

彼らをはじめて代議員権問題の本質を知ったとき、この代議員権問題があまりにも非民主的であり、下部でほんとうに苦勞してたかっている党員を無視した国会議員などへの特権の付与が許され、納得されるものではない。討議を深めれば深めるほど党員の大多数には「絶対反対」の声が強くなった。

ごく一部には賛成する者もいたが、それらはすべて市会議員の声であり、「推進協」の資料による発言内容であることが明白であった。この声も大多数が本質を理解した反対の態度の前には、説得力を欠き、賛成することが彼らにとっては不利になっていった。

統開大会直前一二月一〇日に開かれた県本部委員会でも当然のことながら、代議員権問題については反対であるとの基本線が確認された。しかしその前日八日に開かれた党中央における各都道府県代表者会議での確認事項等もあり、飛鳥田問題とも関連してこの代議

員権問題は、一部矛盾したたかいにならざるをえない性格があった。

基本的に反対であれば最後まで徹底して反対でたたかうべきではないか、私の矛盾もそこにあった。九月大会に参加し、私もふくめ前述のように満場一致で決定してきたことになっていて、大会決議を、その自分が「反対」と堂々とたたかねばならぬことにいささかも躊躇あつてはならないはずである。

考えれば考えるほど九月大会に代議員として参加した責務と反省をこんどほど強く感じたことはなかった。

二

党規約第一〇〇条には「党の綱領および規約の改正は全国大会出席代議員の三分の一以上の多数の賛成をえなければならぬ」とある。なおまた「大会議事細則」第二十九条には「採決は挙手、起立無記名投票の方法によるものとする。」とある。

ここに明らかのように採決は、「挙手」「起立」「無記名投票」の三つの方法しかないということである。

とくに大切な議案、この場合「規約」というもつとも強い議案については、多くの労働組合の場合でもおおかたは「……大会出席代議員の直接無記名投票による三分の二以上の賛成……」を必要としているはずである。にもかかわらず九月大会はどうであったか、私もふくめ明らかに多数の反対者がいたにもかかわらず、議場のワアワアする声のなか、拍手の響きのなかに強引にも可決してしまったのであり、それが後日「新報」までが「満場一致」と書いたのである。

採決の三つの方法のいづれにもよっていない議決・党規約の三分の二にも抵触する議決このことについて果して正しかったかの精神が質問された。

また大会運営委員会はこうした問題提起にたいして「大会運営小委員会で論議をして回答したい」と並行的に論議されていた。だが、結論からいえば、この質問にたいする石橋書記長の答弁は、一二月一六日の新報にも活字になってあるように、「……採決の方法については、慣例として拍手という方式をとつたことはなん度もある……」と軽く逃げているが、私は規約や綱領、あるいは党の運命を左右するような重大な路線の決議については、だんじて「慣例の拍手」による採決はありえないことと指摘したい。

また大会運営小委員会の検討した結果についても、書記長答弁後なんら回答されないうままに終わった。

これからすれば今回の統開大会も、今後の党大会その他議事運営について、将来に禍根をのこす誤ちを再度、再度くりかえしたことにのみならずかねないのである。

こうして私たちの強い関心であったこのたたかいは、「大巾な党員数の変動のないかぎり、現行の基本組織からの代議員選出基準には変更はないものとする」という付帯決議案を提出し、党の民主主義をまもるための歯止めをかけてたかつたのである。

その結果「改正規約の実施にあつて弾力的運用を図るよう」新執行部に要望することこれをこれまた満場一致で決定させることになったのである。